

## 英国チーズの豊かさ The Cheese Counter

先日、六本木で立ち読みにつけていたとき、世界の優れたチーズマップ 'The World Cheese Book' という素晴らしい本を見つけました。英国のチーズセクションをパラパラとめくると、スコットランド北部の Lanark Blue (ラナーク・ブルー) から南西イングランドの Yarg (ヤーク) と、英国のチーズが何ページにも渡って紹介されているではありませんか！ 数えてみると、世界の優れたチーズのなかに、英国のチーズは**数十種類 (dozens of)** も。ちなみに、日本は、残念ながら 3 種類だけでした。

私は英国のチーズが大好きです。田舎で育ったので、新鮮な農家の農産物である乳製品に恵まれ、学校に行くときも、かなり匂いの強いファームハウス製のチェダーチーズのかけらをもっていったものです。チーズの色やテクスチャー、形、非常に美味しい匂いと、全て好きです。**多様な (the huge variety of)** どんなチーズも好きです。そして、チーズの名前自体も、Stilton (スティルトン)、Wensleydale (ウェンズリーデール)、Buffalo Blue (バッファローブルー)、Windrush (ウィンドラッシュ)、Celtic Gold (セルティックゴールド) と、それぞれの名前が地域の誇りや多様性、変わらぬクオリティーを表しています。

こんなチーズ大好きな私は、カードミルクチーズへの情熱を理解されずに、見込みのあったガールフレンドから振られた英国生まれのクレイ・アニメーション「ウォレスとグルミット」に登場するウォレスのようでしょうか？ 自分では、ウォレスほどではないと思いますが(タンクトップも着ていませんし)、実は、クリスマスに自分専用のチーズおろし器をお願いしたことが。

英国では、ここ数年、専門業者が増え、普通のスーパーマーケットでも、**かなりの種類 (a reasonable selection of)** の地元産の品質の良いチーズがとても簡単に手に入るようになりました。そんな英国で、特にお勧めのチーズショップは、ロンドン Jermyn Street にある **Paxton and Whitfield** です。このお店で、授賞歴のある Stinking Bishop (スティンキング・ビショップ) というチーズを **かなりの量 (a chunk of)** で購入したときは、チーズがあまりにも刺激的な匂いだったので、私と友人は地下鉄で、チーズを置いたところから 2 つ席を離れて座らざるを得ない状況に……。幸運なことに、車両は空いていたので何事も起きませんでした。でなければ、電車に備え付けられているイマージェンシー・コード(非常時に乗客が引っ張るひも)が使われていたことでしょう。

一方、日本では、美味しいチーズの種類が**少ない (a handful of)** かな。数えやすいので楽ですが……。数えやすいとは言いましたが、日本語の数え方はシンプルではありません。日本語の難しい点の 1 つは、鳥の数え方や、本の数え方、長いもの、短いものの数え方など、**かなりの種類 (sizeable collection of)** の数え方があるということです。深い意味はないのですが、驚きです。英国では、量を表す表現はこの文章中に使ってきたように沢山ありますが、数える表現については、とてもシンプルです。

残念ながら、日本のお店では、英国産の様々な種類のチーズを見つけることは難しいので、次回の英国旅行は、Red Leicester (レッド・レスター)、Caerphilly (ケアフィリー)、Markham Blue (マーカム・ブルー) など美味しいチーズを楽しむ絶好の機会です。私のお気に入り、英国で最も古いチーズである Cheshire (チェシャー)。ほろほろと砕けやすい、きれいなクリーム色のチーズで、ブラックカラントジャムやサイダー、甘いワインと良く合います。

チーズの種類は**かなり沢山 (a great deal)** あり、少なくとも 1000 以上のチーズがあるという推測も。ただ、数に固執すべきではないでしょう。問題は質ですから。しかも、文法学者は、「チーズは数えられない名詞」と指摘するでしょう！

英国のチーズ参考情報: <http://www.britishcheese.com/>